C—78 福島県喜多方地区における衣生活の史的研究（第3報）

呉服商S家の商法と庶民の衣生活について
—明治時代後期を対象として—

聖和学園短大 ○石川妙子、雁部愛
県立米沢女短大 德永綾久
郡山女大家政 関口富佐 門馬寿子 佐原昊

目的　販売者側からの資料による衣生活の史的研究の一環として、前回の大正時代に続いて今回はS家の繁栄期である明治時代に焦点をあてて、その商法及び指導的役割について考究し、併せて同時期の庶民の衣生活の実態を捉えようとした。

方法　S家の公用諸用書留帳を通して同家の明治後期の呉服商としての動きを探り、前回同様小売帳簿のうち売立帳を中心に蔵控帳・金銭出入帳を分析し、聴取りや関係文献を参考にした。

結果　1、S家の積極的商法と地域における指導的役割　(1)眞綿製造法を改良し、講習会を催す等してその技法を普及した。(2)織糸の移入・販売や綿織物工場設立により綿織物の増産をはかり、(3)共進会・博覧会等に出品して賞を得、宣伝及び品質の向上に努めた。また(4)洋服工場を経営し、積極的に洋服着用を勧誘して受注量を増し、(5)自家製の既製品を製造・販売して衣生活の近代化をはかった。

2、当時の庶民の衣生活の実態　(1)古着の販売は少量ではあるが各種のものが扱われていた。(2)織糸として紡績糸の他に和糸の販売も行われていた。(3)布地の販売は切売りが多い。(4)既製品については股引・シャツ等が多く、メリヤス類は少量であった。

以上の結果により、家内工業から工場生産への過渡期にあたり、東北地方の一商業都市において指導的立場にあった呉服商が、地元産業の育成発展に盡力貢献した様子を知ると共に、自給自足の時代から徐々に近代化して行った衣生活の変容の過程を考察することが出来た。